

仕事役割と家庭役割の両立にともなうポジティブな影響

— KJ法によるカテゴリー作成の試み —

加藤 容子¹⁾

問題

近年、夫婦ともに働く共働き夫婦が増加している。平成12年に総務庁統計局が行った労働力調査特別調査によると、夫と妻ともに就業している世帯は全世帯の45.8%である。このように個人が仕事と家庭の両方に関わっている現代において、これら2つの領域にいかに関わらずに良く関わるかということが問題となっている (Aryee & Luk, 1996; 土肥, 1999; Gilbert & Rachlin, 1987; 小泉, 1998; Lews & Cooper, 1983; Sekaran & Hall, 1989 など)。

このような問題について検討している研究を対象として、小泉 (1997) は仕事と家庭の多重役割が心理的側面にポジティブな影響を及ぼすか、あるいはネガティブな影響を及ぼすかという観点からレビューして検討した。その結果明らかになったことの1つに、これまでの研究においてはネガティブな影響に関する研究が多く、ポジティブな影響に関する研究は非常に少ないということがあげられた。しかし多重役割を担う人が日常的に数多くいる現代において、そのポジティブな影響を積極的に取り上げ注目することは重要であると考えられる。そこで本研究では、仕事役割と家庭役割の両方に関わっている人を対象とし、両役割を遂行することにおけるポジティブな影響を抽出することを目的とする。

先行研究において扱われているポジティブな影響は、満足感や心理的幸福感の増大、負担感や不安感の低減といった個人の一般的感情についての指標からとらえられていたり、抑うつや心理的ディストレスの低減といった個人の精神的健康を測定する指標からとらえられている。しかし、多重役割におけるポジティブな影響を考えるとときには、そのような一般的感情状態や精神的健康の状態のみでなく、仕事役割と家庭役割の両方に関わる人自身が、自分の両役割遂行状況に対してどのようなポジティブ

な意味づけをしているかということについても考慮に入れる必要がある。したがって本研究では、仕事役割と家庭役割の両役割を遂行する人が主観的に持つポジティブな意味づけを明らかにすることを目的とする。そして対象者の主観的な意味づけを抽出するために、半構造化面接を行いその質的データを分析してカテゴリーを作成することとする。

方法

対象者

22~61歳の、夫婦で共働きをしているA県在住の女性37人を対象として面接を行った。対象者の属性はTable 1にまとめられた。職業は教師、保母、公務員 (地方自治体職員)、看護婦、医療事務、会社員、サービス業、自営業、店員であった。また就業形態はフルタイムとパートタイムの両方を含む。また家庭役割と家庭外の役割の両方を担っているという点では、家庭外の役割は仕事のみではなく、学生という立場でも同じように考えられると判断し、学生である対象者も3人含んでいる。今回の研究では探索的に指標を抽出することを目的とするため、対象者は幅広く選択した。

調査期日

調査は、平成10年10月から12月、平成11年3月、8月にかけて行われた。

調査方法

半構造化面接調査を行った。質問内容は仕事と家庭の両方に携わる上で、①大変なことはどんなことがあるか、②大変なことにどう対応しているか、③また反対に良かったと思うことはどんなことがあるか、という3点に沿ったものであった。基本的な聞き手のスタイルとしては、対象者の自発的な話をさえぎらないように聞く形であった。

手続き

対象者には事前に面接の目的を明らかにした文書により了解を得、個別面接を実施した。実施場所は、対象者の職場、児童館や学童保育所の一室、面接者の自宅、対

1) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程 (後期課程)

仕事役割と家庭役割の両立にともなうポジティブな影響

Table 1 対象者の属性

	本人			夫		同居家族	
	年齢	職種	勤務体制	年齢	職種	親	子ども
1	22	学生	学生	28	学生	—	長女(1)
2	24	自営業	フルタイム	26	自営業	—	—
3	28	サービス業	パート	29	サービス業	—	長男(8), 次男(6)
4	31	医療事務	フルタイム	31	会社員	—	長女(6), 次女(5)
5	32	公務員	フルタイム	34	公務員	義父(60), 義母(58)	長女(9), 次女(6)
6	32	学生	学生	35	会社員	—	長子(6), 次子(3)
7	33	看護助手	フルタイム	29	会社員	実母(57)	長男(7), 長女(5)
8	33	店員	パート	33	会社員	—	長女(8), 長男(7)
9	33	公務員	フルタイム	33	公務員	—	—
10	35	看護婦	パート	36	会社員	—	長女(8), 次女(4)
11	36	保母	パート	43	会社員	義母(70)	—
12	37	看護婦	フルタイム	42	会社員	—	長女(11), 次女(9), 三女(6)
13	37	会社員	パート	34	会社員	—	長女(7), 長男(5)
15	38	学生	学生	40	塾講師	—	長女(8), 長男(5)
16	39	教師	フルタイム	40	公務員	—	長男(13), 次男(12), 三男(8)
17	41	保母	フルタイム	41	公務員	実父(68), 実母(65)	長男(16), 次男(14), 三男(6)
18	41	教師	フルタイム	42	自営業	—	長女(13), 長男(9), 次男(6)
19	41	教師	フルタイム	50	自営業	—	長女(17), 長男(13)
20	41	保母	フルタイム	44	公務員	義父(71), 義母(69)	長女(11), 次女(9)
21	41	サービス業	パート	44	会社員	義父(74), 義母(66)	長女(16), 次女(14)
22	41	店員	フルタイム	52	会社員	義父(86)	長女(18), 次女(16), 三女(13)
23	41	教師	フルタイム	40	会社員	—	長男(9)
24	42	公務員	フルタイム	47	公務員	—	長男(12)
25	42	事務	パート	41	会社員	義母(67)	長女(16), 次女(12)
26	42	会社員	フルタイム	42	会社員	—	長女(18), 次女(15), 三女(8)
27	42	会社員	パート	45	自営業	義父(71), 義母(67)	長男(17), 長女(15)
28	42	教師	フルタイム	45	教師	—	長男(15), 次男(13), 三男(10)
29	44	会社員	パート	42	公務員	義父(74), 義母(64)	長女(17), 次女(14), 長男(13)
30	45	保母	フルタイム	49	公務員	義父(78)	長男(高校), 長女(中学)
31	48	公務員	フルタイム	47	公務員	実母(78)	長男(19), 次男(14)
32	49	看護婦	フルタイム	50	自営業	—	長女(16), 次女(15), 長男(9)
33	50	公務員	フルタイム	51	大学教員	—	長男(25), 次男(17)
34	51	保母	フルタイム	53	会社員	—	長女(23), 次女(21)
35	56	公務員	フルタイム	59	公務員	—	長男, 別居
36	56	保母	フルタイム	58	会社員	—	長女(28), 長男(25)
37	61	公務員	フルタイム	57	公務員	—	かつて, 長女, 次女

対象者の自宅、喫茶店であった。プライバシーの保護を約束して、筆記記録、さらにカセットテープでの録音を依頼したところ、全員から筆記記録の承諾を得た。カセットテープでの録音には5人が拒否をし、4人は面接場所である学童保育所が録音できる状況でなかったことから、この9人は筆記のみの記録となった。

分析方法

面接において話された内容のうち、両役割遂行にとも

なうポジティブな影響が語られた部分を用い、KJ法(川喜田, 1967)によって分析した。データには現在の状況が語られたものと過去を回顧的に語られたものの両方が含まれたが、今回はその語られ方の違いは考慮せず、内容を同じように分析した。なお、面接内容のうち「①大変なことはどんなことがあるか」、「②大変なことにどう対応しているか」の2点への回答は別に分析された(加藤, 2000)。

結 果

1. KJ法によるカテゴリー作成

仕事役割と家庭役割の両役割遂行にともなうポジティブな影響が語られた内容をKJ法を用いて整理した(Table 2)。まず、各対象者が挙げたポジティブな影響についての内容をカードに転記したところ、97枚のカードが作られた。その後、意味内容によってそれらのカードをまとめた結果、13の小グループを得た。“子どもは自分のことは自分でする習慣がついている”という「子どもの自立」、 “子どもはいろいろな人に育てられて、

新たな面を知ることもあった”という「子育てへの他人の関与」、 “子どもと2人だけの時のイライラがおさまった”という「母子密着からの解放」、 “子どもが勉強する横で仕事をしていると、子どもは嬉しそうだし自分も嬉しい”という「子どもとの同志感」、 “(仕事に出ると) いろいろな人と会えて、良い面をプラスにできる”という「ネットワークの広がり」、 “仕事をしていた方がビシッとする。張りになってる”という「自己実現・やりがい」、 “(仕事に出ると) 社会との結びつきを得る”という「社会性の獲得」、 “収入があるから遊べる余裕ができた”という「経済的余裕」、 “家でのストレスが

Table 2 仕事役割と家庭役割の両立によるポジティブな影響のカテゴリー

カテゴリー	反 応 例	反応人数	出現率(%)	
家庭役割でのポジティブな影響	子どもの自立	・子どもが自立してきたように思う。 ・子どもは自分のことは自分でする習慣がついている。	10	23.8
	子育てへの他人の関与	・子どもはいろいろな人に育てられて、新たな面を知ることもあった。 ・いろいろな人と関わりを持つ方が子どもにとってより良いだろうと思う。	6	14.3
	母子密着からの解放	・子どもと2人だけの時のイライラがおさまった。 ・子どもを客観的に見られて、自分のことも考えられるようになった。	6	14.3
	子どもとの同志感	・子どもが勉強する横で仕事をしていると、子どもは嬉しそうだし自分も嬉しい。 ・子どもと家で一緒に勉強する。	5	11.9
仕事役割でのポジティブな影響	ネットワークの広がり	・いろいろな人と会えて、良い面をプラスにできる。 ・いろいろな人と知り合いになれたり、違う年齢の人と話せたりする。	12	28.6
	自己実現・やりがい	・仕事をしていた方がビシッとする。張りになってる。 ・自分を表現する場が獲得できる。	12	28.6
	社会性の獲得	・社会との結びつきを得る。 ・外に出るのは目がいろんな方に向くから良いこと。	7	16.7
	経済的余裕	・収入があるから遊べる余裕ができた。 ・好きなものが買える。	3	7.1
仕事・家庭役割の統合	役割間の補償的關係	・家でのイライラが職場で発散される。 ・仕事でストレスがあっても、子どもの顔を見るとほっとする。	12	28.6
	役割間の道具的關係	・市民の目と母親・主婦の目を生かして仕事にできる。 ・(仕事で) 他の母子関係を見て自分を振り返ったりして勉強になる。	10	23.8
	バランス感	・仕事と家庭2つでバランスが取れている感じ。 ・仕事と家庭、2つの世界があるからうまくいった。	5	11.9
	充実感	・仕事も家庭もやることで張り合いがある。 ・忙しさが生きがいになっているところがある。	5	11.9
	計画性・集中力	・ダラダラしないでシャキッと生活にリズムができる。 ・漫然とやるのではなく、計画性や集中力がついた。	4	9.5

仕事場で発散される”といった一方での不満足を他方での満足で補償する「役割間の補償関係」，“市民の目と母親・主婦の目を生かして仕事にできる”といった一方の役割での特性を他方で生かす「役割間の道具的關係」，“仕事と家庭2つでバランスが取れている感じ”という「バランス感」，“仕事も家庭もやることで張り合いがある”という「充実感」，“漫然とやるのではなく、計画性や集中力がついた”という「計画性・集中力」である。

さらにこれらの小グループは大きなグループにまとめられた。「子どもの自立」「子育てへの他人の関与」「母子密着からの解放」「子どもとの同志感」は『家庭役割でのポジティブな影響』としてまとめられた。また「ネットワークの広がり」「自己実現・やりがい」「社会性の獲得」「経済的余裕」は『仕事役割でのポジティブな影響』としてまとめられた。最後に、「役割間の補償関係」「役割間の道具的關係」「バランス感」「充実感」「計画性・集中力」は『仕事・家庭役割の統合』としてまとめられた。

2. 上位カテゴリーへの評定状況

次に、それぞれの対象者がこれらのポジティブな影響をどのように体験しているかを探るためのひとつの検討として、各データが上位カテゴリー3つのどのカテゴリーに評定されているかを整理した。その結果、3つのカテゴリーすべてに評定されているデータがもっとも多く10人、続いて『仕事役割でのポジティブな影響』のみに評定されているデータが8人、『家庭役割でのポジティブな影響』と『仕事・家庭役割の統合』の2つのカテゴリーに評定されているデータが5人、『仕事役割でのポジティブな影響』と『仕事・家庭役割の統合』の2つのカテゴリーに評定されているデータが同じく5人、『仕事、家庭役割の統合』のみに評定されているデータが4人、『家庭役割でのポジティブな影響』と『仕事役割でのポ

ジティブな影響』の2つのカテゴリーに評定されているデータが3人、そして『家庭役割でのポジティブな影響』のみに評定されているデータがもっとも少なく2人となった（Table 3）。

考 察

1. 主観的な意味づけとしてのポジティブな影響

本研究は、仕事と家庭の両役割遂行にともなうポジティブな影響を、その人自身の主観的な意味づけの観点から抽出し整理した。その結果、家庭役割でのポジティブな影響、仕事役割でのポジティブな影響に加え、両役割を統合しているというポジティブな影響を得ることができた。そして、これらの上位カテゴリー、さらに13ある下位カテゴリーから、仕事と家庭の両役割を遂行している人自身が実感している主観的なポジティブな影響の様相をとらえることができた。ただし、先行研究で扱われていた一般的感情状態や精神的健康についての指標と重なるカテゴリーは「充実感」のみであることから、本研究で得られた主観的な意味づけは客観的な指標と区別して用いることが必要であると考えられる。そして今後は、これらの主観的な意味づけによるポジティブな影響の内容の検討を詳細に進めるとともに、一般的感情状態や精神的健康などの客観的な指標との関連を探ることが課題となるだろう。

2. カテゴリーの内容

1) 家庭領域でのポジティブな影響

家庭領域でのポジティブな影響は、「子どもの自立」「子育てへの他人の関与」「母子密着からの解放」「子どもとの同志感」という、すべて子どもに関係した内容になっている。ここから家庭役割の中では、妻として、あるいは嫁としての役割よりも母親としての役割がポジティブな影響の面では大きな重要性を持っていると考えられる。なお、子どもを持たない対象者の中で家庭役割でのポジティブな影響を挙げた者はいなかった。子どもを持たない対象者にとっての家庭役割でのポジティブ面は今後詳しく検討することが必要となるだろう。

ここでのカテゴリーの中で「子育てへの他人の関与」は、他者からの子育てサポートに対する積極的な意味づけを持ったものであるととらえられる。つまり、他者からの子育てサポートに対して、物理的サポートあるいは情緒的サポートの効果を感じるのみでなく、他者の関与によって自分も子どもも新たな面を知ったりより広い関係性に基づく発達を成すといった効果を感じていると言える。またこの状況の背景には、母親ひとりが育児に励むのではなく、何人かの大人あるいはコミュニティが子

Table 3 ポジティブな影響の上位カテゴリーへの評定状況

家庭役割での ポジティブな影響	仕事役割での ポジティブな影響	仕事・家庭 役割の統合	人 数
○	○	○	10 (27.0%)
○	○		3 (8.1%)
○		○	5 (13.5%)
	○	○	5 (13.5%)
○			2 (5.2%)
	○		8 (21.6%)
		○	4 (10.8%)

どもを抱えるという構造のあることがうかがわれる。次に「子どもの自立」は、母親が子どもと一緒にいる時間が少ないこと、そのために子どもの世話を十分にできないことという現状に対して、自分が子どもの側に四六時中つきっきりでないからこそ子どもの自立が促されるというポジティブな意味を見いだしたものである。また「子どもとの同志感」は、家庭の中で母親が子どもと机を並べて仕事・勉強をすることで、同じく勉強をする子どもと、社会役割を共有できることをあらわしたものである。いずれも、仕事を持っている母親が家庭の中で子どもの世話をする時間が少ないこと、家庭の中に仕事を持ち込まざるを得ないことに対して、ポジティブな意味を見いだしたものである。

また「母子密着からの解放」というカテゴリーからは、家庭役割のみ行っている際の子どもと2人きりでいるイライラが、仕事役割という家庭外の役割を持ち子どもから離れる時間を持つことで、おさまるといふ様子があらわれている。このような理由から家庭外の役割を求める人もいるということが示唆された。

2) 仕事領域でのポジティブな影響

仕事役割でのポジティブな影響としては「ネットワークの広がり」「自己実現・やりがい」「社会性の獲得」「経済的余裕」のカテゴリーが得られた。ここで興味深いことは具体的な仕事内容そのものへの満足感や充実感が語られるのではなく、仕事役割を持つこと自体についてのポジティブな面が報告されたことである。このことから、仕事内容よりもまず仕事役割を持つかどうかということが、ポジティブ面を考える時には大きな意味を持つことが考えられる。

また、「ネットワークの広がり」や「社会性の獲得」においては、家庭役割のみを行っている状態と比較した時のポジティブな面が語られていることが注目される。この背景として、家庭役割のみでは広いネットワークや社会性を得ることができないかもしれないということが推測される。また、家庭役割で広いネットワークや社会性を得られない人が仕事役割にそれらを求めているのかもしれないとも考えられる。

3) 仕事・家庭役割の統合

次に、『仕事・家庭役割の統合』としてまとめられたグループについて考察する。これらのうち「計画性・集中力」は2つの役割を共存させるために必要となる能力が身についたものであり、「充実感」は2つの役割によって忙しい日々に対して、充実しているというプラスの評価を与えたものである。いずれも仕事と家庭の両役割遂行によって時間やエネルギーがより使われるという量的な面に関するポジティブな影響である。

それに対し、「役割間の補償関係」「役割間の道具的關係」「バランス感」は、両役割を遂行することによる質的な面に注目したポジティブな影響であると言える。「役割間の補償関係」は、一方の役割で満足が得られなかったりダメージを受けたりした時に、他方の役割により満足を見出して、全体的な精神的健康を保つものである。また「役割間の道具的關係」は、一方の役割での経験を他方の役割でのパフォーマンスに役立てるものである。そして「バランス感」は、ひとつの役割のみに従事するのではなく、異なる2つの役割に従事することによって、より幅広い能力を得たり自分の居場所を複数獲得するというものである。このようにこれらは、異なる質をもつ2つの役割の統合という観点から見る事ができる。このようにこれらは、質の異なる役割を統合していると見ることが出来る。

以上のように、仕事と家庭の両役割を遂行することによってその量的な面においても質的な面においても、2つの役割を統合していると見なされるポジティブな影響が報告されたことは注目すべきことである。これまで仕事役割と家庭役割の両立に関する研究でネガティブな影響が多く検討されてきたことの背景には、1人の人間が異なるいくつかの役割の統合を達成することができず苦慮するという面のみがクローズアップされて想定されていたことが考えられる。しかし本研究によって、いくつかの役割が個人の中で統合され、新たな気づきもたらされる可能性のあることが明らかとなった。したがって今後の研究においては、いくつかの役割の統合についての検討も必要になってくると考えられる。つまり、個人の中でいくつかの役割の統合がどのように成されるのか、またその役割の統合は個人の発達の観点からはどう位置づけられるのか、そして役割の統合は個人の精神的健康やそれぞれの役割でのパフォーマンスにどのような影響を及ぼすのかということをも明らかにすることが必要となるだろう。

3. 上位カテゴリーへの評定状況

次にTable 3にあらわされた上位カテゴリーへの評定状況について考察したい。この評定状況から、3つのカテゴリーすべてのポジティブな影響を報告した人数がもっとも多く約3分の1も占めることが明らかとなった。仕事と家庭の両役割を遂行している人の中で、家庭役割でも仕事役割でもポジティブな影響を感じており、さらに両役割を統合したポジティブな影響も感じている人が多いということである。

次に評定した人が8人と多いパターンは『仕事役割でのポジティブな影響』のみを報告したものである。これ

と対照的に、『家庭役割でのポジティブな影響』のみを報告した人は2人とっても少ないものである。このような2つの役割でのポジティブな影響についての対照的な結果は、次のような背景によるものと推測される。すなわち、本研究の対象となっている女性たちは、家庭役割のみを行う伝統的なスタイルを選ばずに仕事と家庭の両役割を遂行している人たちであることから、特に仕事役割志向が強いのではないかと、したがって仕事役割でのポジティブな影響を感じる事が家庭役割でのそれに比べて多いのではないかと考えられた。

4. 役割間のインターフェイス

次に『仕事・家庭役割の統合』の中の「役割間の補償関係」と「役割間の道具的關係」というカテゴリーについて、役割間のインターフェイスのモデルに関する議論の観点から考察する。仕事役割と家庭役割のインターフェイスについては流出モデル、補償モデル、対立モデル、道具的モデル、分離モデルという5つのモデルが提唱されている。それぞれのモデルは以下のように説明されるものである（Watanabe, Minami, & Takahashi, 1997）。

流出（Spillover）モデル 仕事領域で経験される満足感や不満感、そのまま家庭領域へと流出する。また、家庭生活に対する態度も仕事生活にそのまま波及していく。例えば、仕事が順調で高い職務満足感が得られれば、家族との相互作用も良好となり、家庭生活も充足化される。逆に、仕事の内容や職場の人間関係に不満感が経験されると、そのストレスのはけ口を家庭内に求めるようなことが起こり、家庭生活にネガティブな影響が及ぼされる。

補償（Compensation）モデル 職場で不満感を経験しているものは、心理的均衡状態を取り戻すために、家庭生活を充足化させようとする、逆に、家庭内で幸福感が得られなければ、その状態を職場で補償しようとする。このように、仕事生活と家庭生活は相互補償的であるという考え方が、このモデルの特徴である。

対立（Opposition）モデル 仕事領域と家庭領域における活動は、車の両輪の如く歩調を合わせる事が難しく、互いに対立的・葛藤的關係にあると主張するモデルである。一方の領域における満足や成功経験は、他方の領域において支払う犠牲のうえに成り立つということである。

道具的（Instrumental）モデル 一方の生活領域における経験は、他方の生活領域において何かを獲得するための手段として機能する。例えば、職業が安

定的で給与もそこそこであれば、ある程度の快適さを家庭生活にもたすことができる。

分離（Segmentation）モデル このモデルでは、仕事領域と家庭領域は互いに独立・分離の關係にあると唱えられている。一方の領域は他方の領域に対していかなる影響をも及ぼさない、という立場である。

これらのモデルはそれぞれ異なる研究者達によって支持されており、どのモデルが正しいかという議論は未だ混沌とした状況である。Watanabeら（1997）はそのような先行研究の限界として、次の2点を指摘している。第1に、仕事生活と家庭生活の關係が、個人要因と状況要因によって調整される可能性が十分に考慮されていないことである。第2に、両領域間の関連構造は継時的に安定しているのか、もしくは変容するのか、という問題についての関心が欠如していることである。そしてこれらの理由のため、人々の特性や状況が異なれば、仕事・家庭間のインターフェイスも異なるかもしれないし、ある個人の仕事・家庭間のインターフェイスがある時点で流出的であったとしても、他時点では分離的となるかもしれないと述べている。このように、仕事役割と家庭役割の關係はいずれか1つのモデルで説明されるものでもなく固定的であるわけでもないならば、この5つのモデルは並存している可能性があると考えられる。

今回の調査で得られた「役割間の補償的關係」は補償モデルに、「役割間の道具的關係」は道具的モデルにそれぞれ該当した反応であると考えられる。また方法で述べられたように本研究の面接調査における対象者は、葛藤モデルによって表されるワーク・ファミリー・コンフリクトも同時に聞き取られている人（加藤, 2000）の一部である。そこで37名全員においてワーク・ファミリー・コンフリクトが語られたことから、葛藤モデルに該当する状況もあらわれていると言える。したがって、5つのモデルのうち少なくとも補償モデル、道具的モデル、葛藤モデルの3つのモデルが並存する可能性が示された。特に、今回が面接調査であることから、仕事と家庭の両役割を遂行している人自身にこれらのモデルにあらわされる現象が実感をともなうものとして体験されていることが分かった。しかし、今回の調査ではこれらのモデルの検討を目的としたものではないため、Watanabeらの指摘する状況要因、個人要因、また継時的安定性要因を含めて分析し検討することはできない。したがって、今後はWatanabeらの指摘する要因、さらにその他の要因を含め、これらのモデルが並存するのか、変化するのかといった詳しい分析をすることが必要となるだろう。

まとめと今後の課題

本研究では半構造化面接を行い、仕事と家庭の両役割遂行にともなうポジティブな影響を抽出しカテゴリー作成を試みた。その結果、仕事と家庭の両役割を遂行している人の主観的な意味づけにもとづくカテゴリーが得られた。今後の課題としては第1に、これらのカテゴリーを信頼性と妥当性を備えた質問紙尺度とすることがあげられる。また第2には、本研究で得られた主観的な指標とこれまで用いられてきた客観的な指標との関連を明らかにすることが課題となる。そして第3にはこのようなポジティブな影響を、両役割遂行によるネガティブな影響、すなわちワーク・ファミリー・コンフリクトやネガティブ・スピルオーバーと関連させて検討することが必要となる。そして最終的には、仕事役割と家庭役割の両立にともなう状況を多面的にとらえることが課題となる。

引用文献

- Aryee, S. & Luk, V., 1996 Balancing two major parts of adult life experience: Work and family identity among dual-earner couples. *Human Relations*, 49(4), 465-487.
- 土肥伊都子 1999 “働く母親”, 多重役割の心理学 東洋・柏木恵子(編) 流動する社会と家族 I 社会と家族の心理学 ミネルヴァ書房 Pp. 113-136.
- Gilbert, L. A. & Rachlin, V. 1987 Mental health and psychological functioning of dual-career families. *The Counselling Psychologist*, 15(1), 7-49.
- 加藤容子 2000 ワーク・ファミリー・コンフリクトへの対処—夫婦の関係性の観点から— 日本発達心理学会第11回大会発表論文集 374
- 川喜田二郎 1967 発想法 中央公論社
- 小泉智恵 1997 仕事と家庭の多重役割が心理的側面に及ぼす影響: 展望 母子研究, 18, 42-59.
- 小泉智恵 1998 職業生活と家庭生活 柏木恵子(編) 結婚・家族の心理学 ミネルヴァ書房 Pp. 185-232.
- Lewis, S. & Cooper, C. L. 1983 The stress of combining occupational and parental roles: A reviews of the literature. *Bulletin of The British Psychological Society*, 36, 341-345.
- Sekaran, U. & Hall, D. T. 1989 Asynchronism in dual-career and family linkages. In M. B. Arthur, D. T. Hall, & B. S. Lawrence (Eds.), *Handbook of career theory*. New York: Cambridge University Press. Pp. 159-180.
- Watanabe, S., Minami, T., & Takahashi, K. 1997 The emerging role of diversity and work-family values in a global context. In M. Erez & P. C. Eaalley (Eds.), *New Perspectives or Industrial/Organizational Psychology*, San Francisco: Jossey-Bass. Pp.276-318.

(2001年9月20日 受稿)

ABSTRACT

The positive effects of combining work and family roles
: An trial of categorization with KJ method

Yoko KATO

This study investigates the positive effects of pursuing work and family roles in married working women. 37 women participated semi-structured. Following three categories and thirteen sub-categories were revealed that: 1) the positive effects on family role (children's independence, participation by others in child care, liberation from mother-child close adherence, kindred spirits with children), 2) the positive effects on work role (extension of network, self-actualization/worth doing, gaining of sociality, economic stability), 3) the integration of work and family roles (compensational relation of inter-role, instrumental relation of inter-role, sense of balance, sense of fulfillment, plan/concentration). Further understanding on positive effects of pursuing work and family roles in married working women is discussed.

Key words: combining work and family roles, positive effects, categorization, KJ method.